K

現代の文学＝43

大江健三郎集

われらの時代
芽むしり 仔撃ち
奇妙な仕事
死者の奢り
他人の足
飼育
人間の羊
見るまえに跳べ
戦いの今日
ここより他の場所
共同生活
後退青年研究所

河出書房新社

現代の文学 43　大江健三郎集

© 1964

責任編集

川端康成　丹羽文雄
円地文子　井上　靖
松本清張　三島由紀夫

昭和 39 年 8 月 1 日　初版印刷
昭和 39 年 8 月 8 日　初版発行

定価　390円

著　　者　大江健三郎
発 行 者　河出孝雄
印 刷 者　高橋武夫
装　　幀　原弘(N.D.C)

印　　刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函　　貼・神崎製紙(ミラーコート)
同 納 入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社 小島洋紙店

発 行 所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社

電話東京 (291) 3721～7
振替口座 東京 10802

製本・加藤製本　　落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

われらの時代……三
芽むしり仔撃ち……一七五
奇妙な仕事……二九一
死者の奢り……三〇二
他人の足……三二九
飼育……三四一
人間の羊……三七八

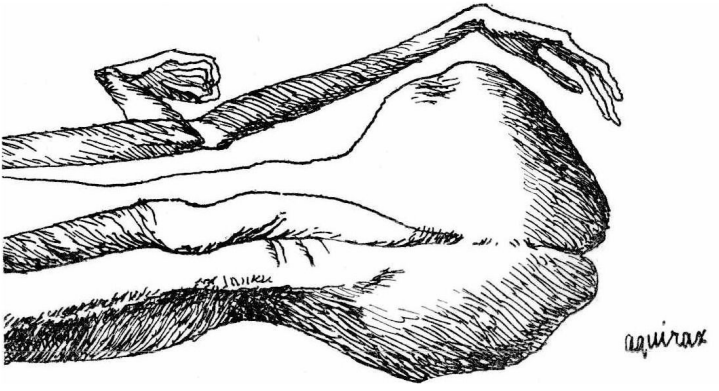
見るまえに跳べ……三九三
戦いの今日……四三三
ここより他の場所……四七五
共同生活……四八七
後退青年研究所……五一五
年譜……五二七
解説……奥野健男……五二九

挿画　宇野亜喜良
写真　三木　淳

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

大江健三郎集

われらの時代



I

快楽の動作をつづけながら形而上学について考えること、精神の機能に熱中すること、それは決して下等なたのしみではないだろう。いくぶん滑稽ではあるが、それは大人むきのやりかたというものだろう。南靖男は、かれの若わかしい筋肉となめらかな皮膚のすべてを快楽のあぶらにじっとひたしながら、そして力をこめてかれの愛するものの柔らかい体、脂肪にみたされた汗まみれの中年の女の体を愛撫しながら、孤独な思考に頭をゆだねていた。孤独な思考、しかしそれは、いつもくりかえされる自己嫌悪と絶望感にみちた堂どうめぐりの考え、むしろ一種のデスパレートな気分とでもいうものだ。かれの情人は、かれが性交のあいだにものを考えることを許していた。彼女はふんべつざかりで、ものをわきまえている。自分より若い青年が、彼女を抱きながら、ひたすら彼女の性器について熱中しつづけると考えるほど未経験ではなかったし、それをのぞんでもいなかった。彼女の体のうえにいる青年が、彼女の体よりほかのものについて考えることで、性交の時間がのびるとすれば、彼女

にとって不満におもうことはない。そこで彼女は、低く力のこもった声でうめきながら楽しんでいた。

日本の若い青年にとって、積極的に希望とよぶべきものはありえない、と南靖男は汗のためにすべりやすい腹を安定させるために肱に力をこめたり膝をつっぱったりしながら、そしてそのあげくかれの体のしたの熱く柔らかい体からますます無遠慮なうめき声をひきだしながら眼をつむり眉をひそめて考えていた。希望、それはわれわれ日本の若い青年にとって、抽象的な一つの言葉でしかありえない。おれがほんの子供だったころ、戦争がおこなわれていた。あの英雄的な戦いの時代に、若者は希望をもち、希望を眼や唇にみなぎらせていた。それは確かなことだ。ある若者は、戦いに勝ちぬくという希望を、ある若者は戦いがおわり静かな研究室へ陽やけして逞しい肩をうなだれておずおずと帰ってゆくことへの希望を。希望とは、死ぬか生きるかの荒あらしい戦いの場にいるものの言葉だ。そしておなじ時代の人間相互のあいだにうまれる友情、それもまた戦いの時代のものだ。今やおれたちのまわりには不信と疑惑、傲慢と侮蔑しかない。平和な時代、それは不信の時代、孤独な人間がたがいに侮蔑しあう時代だ。《宏大な共生感》という言葉をかれはフランスの中年の作家の書物からさがしだして覚えていたが、それも戦争のイメージ、暗い夜のむこう

にとどろく荒あらしい海の襲来のようなイメージとつながるものなのだった。ああ、希望、友情、《宏大な共生感》そういうものがおれのまわりには決して存在したことがない。おれは遅れて生れてきた、そして次の友情の時代、希望の時代のためには、あまりにも早く生れすぎたのだ。

女の指がかれの背にくいこみ、鋭く熱い痛みがかれに歯ぎしりさせた。そしてかれは快楽の小さな芽がうまくめばえて下腹部にふくれひろがりはじめるのを感じた。それを育てみちびき爆発させねばならない。ときにはまったくうまく育たず、たちまちむずがゆい快楽の芽はかれしぼみ、いくらかさねて体をうごかしても性器は充血したゴムのかたまりにかわって、厚ぼったく無感覚になってしまうことがあるのだ。そうなってしまうと屈辱に唇をかみながら動作を中止して、みたされないまま横たわるほかない。南靖男は二十三歳でしかなかった。その若さでこうなのだ。性器が勃起するということはがいして生理的な側面のできごとにすぎない。若い犬とおなじことだろう。勃起した性器を射精までみちびくこと、それが精神にかかわる人間的な作業なのに、かれにとってそれはときに不可能なのだった。生理的な要因とは別の、純粋に精神的な不能。この一種の精神的なインポテンツが靖男をふくむ、かれの大学の若い学生たちのあいだに疫病のように猖獗をきわめていた。これも平和の害毒だ、悪しき時代に生れてきた若者は充血したゴムの性器を長いあいだこすりつづけ、疲れきって青息吐息で、しかもこれっぽっちの快楽もおこらない。

靖男の友人の一人は大きくのっぺりした顔をもった大男だが、従妹と三時間かかってただ一度の射精をおこなったといっていた。それも習慣となれば毎日の三時間、充血した硬いゴム棒の三時間が苦にならなくなる。従妹は昼のあいだ階段をのぼるためのほんの狭い開股にもたえられないほど痛めつけられる。六カ月のあと、従妹の性器を診た医師は感嘆して、あなたはほんとうに十六歳ですか、十年の性生活をへた人のようだ、と批評したのである。つまらない話だがほんとうだ。

しかし靖男は好運にも、かれの下腹部に育てつづけた芽をしぼませることなしに順調な過程へおしあげることができた。急激な上昇、かれの火のように赤く熱い頭のなかで、希望、《宏大な共生感》、孤独、充血したゴム棒がぐるぐるまわり勢いよく破裂した。かれ自身の荒い呼吸の音、女の呻き、そしてすべては静かに遠ざかった。かれはもう孤独な思考をつづけなかった。そしてついに今しがたかれをおそった快楽のなごりに溶けこんでいった。これが労働した者の権利である。

かれが性交において好む唯一のものが、快楽の消えゆ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

くまぎわの、皮膚いちめんにおこる小さな可愛らしい震えだった。そのときかれは自分の震えている皮膚を、自分とは無関係な一つの物のように感じる。それは気持がいい。追いたてられたり、他者から見つめられたりする感情と逆のものである。

快楽の震えは、始め体のあらゆるすみずみに波だっているのだが、しだいに局部化し、そのあげく消えていって、そのあとに生あたたかい空虚を残すにいたる。いま、それは足指と尻、こわばった唇のはしと熱い頬にせっかちな震動をつづけていた。かれは眼をつぶりうっとりして、硬い筋のある肉のようにそれを嚙みしめ味わっていた。暑かった、汗が体いちめんに流れていた。快楽のふいのたかまりと力をかぎりの抑制、そしてそれをつきやぶっての熱い噴出。下肢が運動をやめてぐったり静止すると、その瞬間から皮膚は過度の熱を発してこわばりはじめ、汗をたえまなくにじみださせはじめる。汗はむずがゆい尾を虫のようにひきずりながら、脇腹や喉をすべりおりてゆく。汗の動きが快楽のこきざみですばしこい震えを喚起することもある。それは思いがけない速さで汗にしたがって移動したりもする。労働のあとの充足したやすらぎ、快楽への資格、頭のなかの無風状態。

快楽の震えはしだいにまばらになり、めだたなくなり、それから消えさっていった。そして靖男は、いったん皮膚の表面から消えた震えが肉の奥そこふかく沈み、そのあげく下腹部をめぐってとどこおっているのを感じた。かれの性器はぐっしょり濡れて萎縮しきっていたが、細い喉の呼吸のような、かすかな脈搏をうちつづけることはやめないのだった。そしてそれは懐かしい通信のようにうったえていた。かれの性器をつつみこんでいるものは、熱く湿ったそれは、静かにしかしぐっと力をこめて圧迫をくわえてきていた。そしてかれは静かに外へ押しだされようとしているのだった。

戦いおわり、沈黙して後退する軍団、おしだまった退却、《宏大な共生感》、シーツを汚すことをさけるためにそこへのびてくる沈着な手をかれは期待していたが、女の手はなかなかやってこず、まにあいそうになかった。かれはあわてぎみになり力をこめ、押しだそうとする圧迫にさからおうとしたがうまくゆかなかった。加速度的に圧迫はつよまり、ついにかれの性器は小さな咳のような身ぶるいをしてすばやく脱けだし外部の生あたたかい空気にふれた。

ああ、と女は深い嘆息のような、優しい呻きをもらしていた。靖男は肱に力をこめ、頭をもちあげ眼をひらいた。かれの体の下にあった汗ばむ女の体、一個の柔らかく熱い性そのもののような存在がたちまち変容した。個性をもち名前をもつ他人がそこに横たわっていた。靖

男は堂どうとして大きい、立派な中年の女の頭を、頼子そのものを見おろした。彼女のまるみをおびて広い額は、おのおのしっかり独立してもりあがっている汗の粒つぶをいちめんにうかべ、それらは光っていた。眉はひそめられ苦しそうだった。そしてその下に、やはりまるみをおびて広い瞼が、こちらはたがいにふれあって形のくずれた汗つぶをこびりつかせてゆるやかにつむっていた。

靖男は、垢がたまって黒い毛穴のぶつぶつひらいている皮膚、荒れて艶のない皮膚をたんねんに見つめた。頼子の体じゅうで、かれにとってもっともエロティックなのは顔の皮膚だったから、かれはどうにかして顔の皮膚と性交できたらと考えることがあるくらいだった。鼻孔がふくらみ荒あらしく息をはいていた。まくれあがっている上唇のしたに、黄褐色の、おとろえた歯茎がのぞいていた。たしかにいまもそれらはエロティックだった。かれは熱心にそれらを見つめた。歯茎からは、むっとくる臭い、金属質の感じの、じつに厭な臭いがたちのぼってきていた。かれは自分も鼻孔をひろげてそれをすいこみ、胸をむかつかせた。さあ、とかれは号令のように胸のなかでつぶやいた。嘔気をごまかしてしまうためだ。それからかれは、頼子の体のうえからすっかり裸で汗にまみれている自分の体、すでに頼子の性器から自由になっている自分の体を横にすべりおろそうとした。

肩をきつくひそめ眼をつむったまま、頼子がしっかりかれの背をだきしめ、腿でかれの腰を搾め木にかけるようにがっしりとらえ、爪をかれの脇腹にたてて《捕獲》を確実なものにした。身動きさえできない。靖男はうんざりしてふたたび頼子の頭のうえへ胸をおろし、シーツのめくれあがった大きい枕に頬をうずめて窓の向うの夕暮れた庭を見た。

夏のおわりの重おもしい夕暮だった。厚い層のおくに光をたたえている、半透明で膠質の、艶にみちた粘土色、灰がかった涙ぐましい粘土色の平坦な雲におおわれた北の空を靖男は見つめていた。そこへ限りなく数おおい空気の粒、すでに沈んでしまった夏の太陽からの強靱なエネルギーをうけた小さな粒つぶが吸いこまれてゆく。

この空は、職場で見るべき空だ、兵士にとってのみ真に悲劇的な昂揚をつたえてくれる空だ、おれはほんとうに悪い時代に生れた、空の色にさえことばまれている、と靖男はうらめしい気持で考えた。おれたちが、こんな空の色をしっかりうけとめることのできるのは、せいぜい戦争映画のなかだけでなんだからな。死ぬまで一人の男を殺す機会にもめぐまれない若者にはもったいない空の色というべきだろう。しかしそれはおれの責任ではない

のだ。

靖男のまわりで夏はたしかに終ろうとしていた。庭の茂った灌木、高い柿の木、その向うのぎこちなく荘重な造りの大きい家、それらすべてが夕暮れ、夏を終ろうとしていた。夕暮れのひそやかで小市民的な静けさ、それは靖男にもふさわしかった。靖男は、その小市民的な静けさのなかで、口腔にすさまじい悪臭をひそめている女と情事を終ったところだった。かれはものもいわず体をうごかし、最後にちょっと呻いただけで、結局、完全に小市民的なやりかたで情事をおこない、充分な満足をえていた。

おれはこの女との情事にきわめてたくみに慣れてしまっている、おれたちはまるで中年の夫婦のように、べとべとする汚ならしい中年の夫婦のように慣れてしまっているな、うす暗いあかりのついた茶の間で銀婚式の相談でもしている夫婦のようだ、と南靖男はじりじりして考えた。

頼子は古い女房のように裸のかれにしがみついて快楽のなごりと疲労のなかでうつらうつらしていた。靖男は頼子の、汗のためにむれて赤く柔らかくなり、すべすべする腹のうえからおりたいと思った。そしてすでにこわばってきはじめているかれ自身の分泌物をぬぐいとりたかった。しかし頼子はかれにじっとしがみついていた。日本の若い青年は裸の体にじっとしがみつかれて動きがとれない、やりきれないとらわれの状態にある。かれらは自分を解放するために荒あらしい行動をおこなうべきであるが、かれらはそれよりも無力感のなかに沈んで裸の皮膚から汗を流していることをえらぶ、と靖男は考えた。滑稽な連想だったがとても笑いだす気分ではなかった。かれは頼子の腕をふりほどくこともせず笑いもせずじっととらわれていた。

そして靖男はもういちど、頼子の大きく立派な頭の青っぽく見える肌に汗のこまかな粒がふきでているのを見つめた。それから、その頭をだきかかえている腕、自分の若わかしく逞しい腕にふき出ている汗の粒を見てからかれは眼をつむった。痛ましいものを見たときのような感情がしばらく尾をひいていた。こんちくしょう、とかれは考え、その感情をおいちらした。

頼子の体のうえにいることをかれは嫌いなわけではなかった。ただ、暑すぎるのだ。汗は皮膚にこびりついたまま蒸発せず、うらめしいくらいじとじとしている。頬をうずめた枕は、それが頼子の身もだえする腰のしたにしかれてあったときに吸いこんだ多量の酸っぱい汗をかれの鼻孔へじくじくかえしてよこした。

汗の臭いをかぎながらじっと眼をつむっている。汗の臭いへ、鼻孔の粘膜を鋭く刺激する別の臭いがまじって

くる。それはかれらの性器からたちのぼってきた。そして階下では家具を動かすもの音、人の歩く足音がしていた。

窓から新しい風が吹きこむ。それは汗にぬれた裸の尻と背に冷えびえとした感触をつたえ、身ぶるいの波だちをおこした。靖男は、頼子がそのまま眠りこんで風邪をひいてしまうことを心配していた。そこでかれは頼子のなめらかな脇腹にまわしたままの腕で頼子を揺さぶった。頼子と一緒にかれ自身も揺れ、汗にぬれた頼子の腹からかれはすべりおちそうだった。

ああ、と頼子は非難にみちた呻き声をあげ、しっかり靖男の背をだきしめた。それから頼子は腰をよじり、ぐったりしたままのかれの性器をふたたび彼女のなかへみちびきいれようとした。それは意味のない、むしろ慣習からのような動作だった。かれらはもういちどくりかえしてそれを行なおうと考えてはいなかったし、時間の余裕もなかった。ただいつの場合も、頼子はできるだけ長いあいだかれを彼女の体のなかにとどめておきたがり、かれがそれを拒みでもすれば、あるいは異議を示すためのほんのかすかなみぶりでもすれば、苛だちはじめ、ついには手がつけられないほど昂奮してくってかかってくるのだ。靖男は頼子が死のまぎわにでもいるように、情事のなごりにすさまじい執着をしめすことに興味をいだいていた。おれ自身なら、明日、性器を切りとられるときまっていても、この女のようには深刻に今日の性行為にみれんがましくすがりつきはしないだろう。ただ靖男は頼子のぶくぶくした掌をさえぎろうとは思わなかった。かれは情事のあとで自分にさわられることを好きではなかったが、眼をつむってそれに耐えていた。下腹部に小さく柔らかい人形を一つもっていて、それを可愛がられているような気持だった。そしてちょっとなさけなかったし鳥肌だつような気分でもあった。かれがはじめて娼婦を買ったとき、その働き者の小女はかれをすばやく絶頂に達せしめるために指をそろえてかれの尾骶骨（びていこつ）をくすぐるのだった。その時もなさけなかったし鳥肌だってきた。ああ、ほんとうに日本の若い青年は不当に屈辱をなめながら、裸の下腹部をいじりまわされる、尾骶骨をくすぐられる。あの小女はかれがそれをいやがると、唇をとがらせていったものだった。あんた、わたしはまだ三つしかやってないのよ、能率をあげたいもんね、ああ、能率。

手ごたえのあいまいな、骨のおれる作業をかれの下腹部はうけていた。そして反応をしめさなかった。頼子があきらめて腕をふたたびかれの背に戻したとき、かれの背のせんさいな皮膚はぬれた指の接触をぐにゃりと感じた。靖男はふいにおこった嫌悪に歯をくいしばって喉の

おくで呻いた。
「苦しいの、どうかしたの？」と頼子が睡がっている嗄(しわが)れた声でいった。「しゃっちこばっているのね」
「なんでもないんだ、寒気がしただけなんだ」
靖男は嫌悪の感情がもれて出るのを歯をかみしめてふせぎながらいった。かれは感情の昂揚を演技することはできなかったが、その逆に感情の動揺をおしかくすことはできた。十歳以上も年のちがう情人とくらしてゆくためにはそれくらいの技能を習得する必要があるのだった。
「毛布をかける？」と裸の足でベッドのすそを探りながら頼子がいった。
皺のいちめんによった女の足うらが蟹のようにごそごそ動きまわって毛布をさぐるのは少し滑稽な眺めだろう。
「いいよ、暑いから。汗をかきたくないんだ」
「そうなの？」
頼子は足うらでさぐる動きをやめ、そのかわりにゆっくり腰をよじって、尻をベッドのくぼみにうまくおちつけようとしていた。それは頼子の汗にぬれてべとべとする腿のあいだにはさまれているかれの疲れはてた性器にちくちく痛む衝撃をあたえ、かれをますますみじめな気持にさせた。若い青年にとって性交は快楽とおなじくらいの分量のみじめさをはらんでいる行為なのだ。むきだしの尻を上下させ息づかいも荒くがんばっている若者の体のしたで、けちな鼻の小女が能率についての顧慮から、上下する尻の尾骶骨のまわりを指をそろえてきわめて事務的にかさかさひっかく。しかもそれに誘発されて能率よく射精する若者が、みじめな気持にならないでいられようか？　しかも小女は職掌がら、石のように堅固な不感症ときていたものだ。きみはなぜそんなに不感症なんだ？　百円くれるなら、いったげるわよ、あんた、チップくれる？　これこそ地獄のようなみじめさだ、ズボンもはかず靴をひっかけて逃げだしたいくらいなものだった。やっとすんだのね、長いわね、あんた、少しは色をつけてくれるんでしょ？
「蝉がずいぶん鳴いてるわね、気がつかなかったけど」と頼子はのんびりしたことをいった。
「ブナの木に何匹かつかまって鳴いてるんだ」
蝉はじんじん鳴き暑くるしかった。風は二度と吹いてこなかった。
「快感がまだ少し残ってるのよ」と頼子が欠伸をかみころすために喉をふくらませながら、そしてかれの下腹部までそのかすかな肉の動きを波動させながらいった。
「まだ少し、おなかのところに残ってるのよ、とても良かったわ」

この女は牛だ、食いしんぼうのみれんがましい家畜だ、いつまでも反芻している。快楽のなごりを追いもとめ、すわぶりつくそうとしている。靖男はからみつく腕と腿のあいだで動きのとれない自分をひどく無力に感じた。

「ああ、天使にだかれたみたいに良かった、こんなことはあまりないわ」

「そろそろ起きよう、時間がないんだ」と靖男は不機嫌な子供のようにいった。

「そうね、時間がないのね」

頼子は柔順に、そしていくぶんうらめしそうに幼ない声でいった。それからかれの体をおそろしく力強くぎゅっとだきしめてかれの息をつまらせた。

「天使はもうしばらくのあいだ、睡っていていいわよ」

靖男は頼子の体からすべりおりあおむけによこたわった。頼子が素足のまま床におりた。靖男は大きく平静な呼吸をし、枕にふかぶかと頭をうずめたまま動かなかった。そしていままで頼子にふれて熱くなっていた腹をシーツでごしごし、こすりつけた。ひんやりして清潔を気分だった。平安とやすらぎが汐のようにかれの内部におこり、おしよせてきた。頼子がぬけ出ていったあとのベッドでじっとして一人の時間をもつこと、それはすばらしい《自由》の享受のように感じられる。かれは親もとからはなれて上京してきた洋裁学院の女の子のように、恥も外聞もなくのびのびと解放された気持になり、そしてものたりない一種の脱落感を胸の柔らかい部分にひろがらせた。あの夢中になって新しい化粧をならったぱっと出の女の子たちは、この種の感情をバネにしてたちまち下降の過程にとびこんでゆく。しかしおれは下降してゆかないでじっとしている。結局おなじことだ。

靖男が最初に頼子と会ったのは雨の激しくふる夜で、頼子は外人向きの娼婦だとすぐにわかる服装で、雨にぬれた髪を頭のまわりにぐるぐるまきつけていたものだった。その夜ホテルの小さな部屋で、情事のあとに、なにかこまごました用事を思いだした頼子が、舌うちしたり不平がましく唸ったりしながらベッドから出てゆくたびに、靖男はこの解放感と平安の最初の芽のようなものが胸にそだつのを予感のように感じた。頼子と暮しはじめて長くたったいま、それは予感のとおりにしだいに成長し、大きくかれの心に居すわってしまっている。ほんとうに《自由》の享受とはこの種の感情なのだろう。しかも自由がうしなわれているという感じも、《自由》を享受しているという満足も、二つながらに優しい節度のようなものに統一されていて、決して荒あらしくおそいかかってきたりはしない。したがっておれはそれを打ちやぶってのがれでたり、獲得したそれのために血を流して戦ったりする意志をそだてることができない。おれにと

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong